

新潟日報特集

～広い空を求めて～

佐渡島でトキの復活を目指して2008年に放鳥が開始されてから15年が経過し佐渡でのトキは500羽を超え節目を迎えようとしています。

新潟日報の手嶋理記者が見てきた佐渡の現状と2026年に迫る本州能登での放鳥への取り組みを取材し令和5年10月26～28日の3日間特集として報道。





トキ放鳥15年

佐渡市では2008年9

月25日に10羽のトキが初放

鳥された。15年余を経た今、

野生下のトキは500羽を

超えるほどに増えた。生息

域をさらに広げるため、環

境省は昨年、石川県や島根

県の一部地域を本州での放

鳥候補地として選定した。

鳥生復帰を果たした佐渡

で、たくましく生きるトキ。

その生態や課題、候補地の

現状など、広い空を求めて

羽ばたくトキを巡る動きを



00羽ほど離れて止めた車の中から、環境省佐渡自然保護官事務所の菅野萌さん(26)が望遠鏡をのぞいた。

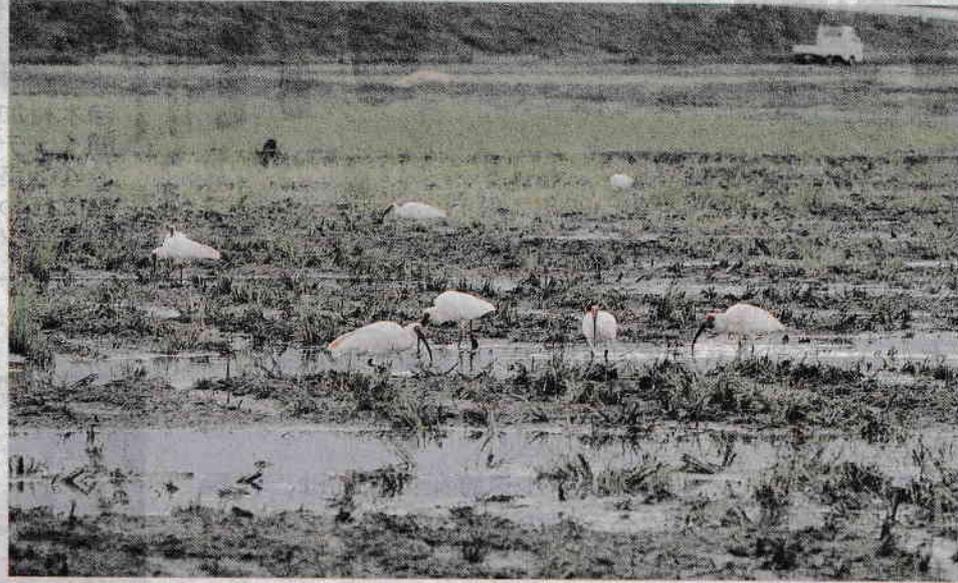
「非繁殖期の9〜11月は群れになることが多いんです」。トキの生態などを観察するモニタリングが菅野さんの仕事だ。足輪などで個体を識別し、観察の結果を細かく記録する。

2008年に初めて放鳥されたトキは10羽。順調に増加し545羽(推定値)が暮らす今は、当時は想像もできなかったほど日常的に群れが見られるようになった。

だが、増えたからこそ見えてきた問題がある。「トキは水田の多い平野部に集まっていて、他の地域ではあまり見られない」(菅野さん)。増加で過密とも言える状態が生じ、トキが互いに干渉しあったり、感染症への耐性が弱まったりする懸念も出ている。

個体増 平野部に集中

ストレスで繁殖に影響も



水田で餌を探すトキの群れ。羽数が増加し、日常的に見られる風景になってきている=25日、佐渡市

近年は、野生下で多くの鳥後数年は苦戦したものの、12年に18組のペアが営巣し、8羽が巣立って以降、順調に数を増やしてきた。しかし、3割以下の34羽だっ

「けんかが頻発するほか、テンなどの格好の餌場として狙われやすくなった」。その結果、コロニー内の全志教授は「過密状態によるストレスを感じていることが一因」とみる。

トキは繁殖期となる3月ごろから群れを離れてペアで巣作りなどを行い、一つの営巣林に複数のペアが集まる「コロニー」を形成する。だが野生下で生まれたトキが多くなった18年ごろから、ペアが集まりすぎてしまう現象が増えてきたと永田さんは指摘す

数が増えたことを喜びながらも、最近の繁殖結果には心を痛める。「集まりすぎて襲われることが増えた。ひなが無事巣立つかなどいつも心配ばかり。もつと分布が広がれば」と願う。

環境省は、平野に面した新穂地区を中心に行ってきた放鳥を、トキの少ない地域でも行っていく計画だ。永田教授は「トキの密度が低い地域での放鳥が進めば、繁殖を成功させるペアも増えてくるだろう」と次のステップに期待した。

野生下トキ繁殖結果



環境省は、平野に面した新穂地区を中心に行ってきた放鳥を、トキの少ない地域でも行っていく計画だ。永田教授は「トキの密度が低い地域での放鳥が進めば、繁殖を成功させるペアも増えてくるだろう」と次のステップに期待した。



トキ放鳥15年

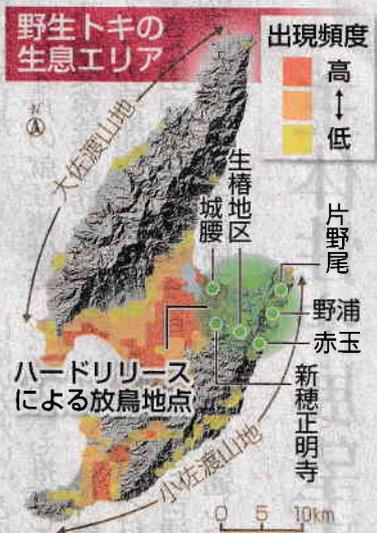
〇〇〇中

9月下旬、佐渡市赤玉集落の空を、10羽のトキが羽ばたいた。ハードリリース方式による放鳥は、赤玉では初めて。木箱を開けた同所の川本礼子さん(70)は「懸命に飛ぶトキの姿を見て、集落で頑張ってきたことが報われた思いがした」と振り返る。

環境省は赤玉を含むこれまで8回のハードリリースを、いずれも小佐渡東部地域で行っている。放鳥地を決める上で特に重視するのが、住民のトキへの愛着だ。

小佐渡東部は野生の国産トキが最後まで生息していた地域で、今も多くの集落でトキの餌場となるビオトープや水田整備が行われている。生息地が国中平野に集中しているも、住民同士が「トキがいつ来てもいいように」と声をかけ合いな

生息域拡大へ対策急務



※生楮、片野尾では2回実施。環境省の資料を基にイメージを作成。地理院地図を加工して作成

から、草刈りなどを継続。農業の使用は制限される上、高齢化が進み、住民への負担は大きい。それでも赤玉集落の自治会長、石崎澄夫さん(71)は「トキのおかげで人間中心の考え方が一変した。自然界の営みの素晴らしさを感じられるようになった」と感慨深そうに話す。

環境省は佐渡全体がトキの生息に適した環境だと考えるが、国中平野以外での出現率は上がらない。同省佐渡自然保護官事務所の篠

×

×

崎さやか・首席自然保護官は、「トキが気付いていないのなら、教えてあげる必要がある」。一極集中を緩和させるために今後進めるのが、大佐渡地域でのハードリリースだ。

実現までの課題は多い。島内でもトキへの熱意に温度差がみられるからだ。特に大佐渡の外海府地域では、田んぼで群れるウミネ

コ対策に手を焼き「トキどのころではない」と話す農家が少なくない。

トキがすみやすい環境づくりのため、農業や化学肥料の使用を減らす農法を進めた結果、水田に餌となる生物が増加。有機肥料として農家が使う魚粉もウミネコが餌として狙う。

魚粉を散布する田植え期と繁殖期が重なる初夏、ウミネコが大量に外海府の田んぼへ押し寄せるようになった。小野見集落の大谷清行さん(81)は「格好の餌場があると学んだのだろう」と苦笑いする。



9月下旬に行われたハードリリースによるトキの放鳥。住民らが見守る中、10羽が勢いよく飛び立った—佐渡市赤玉

住民の理解と愛着 不可欠

小野見では大谷さんが中

ただ、16年間、陣容にほぼ入れ替わりがなく、国中・小佐渡東部以外の地域の参加がない。事務局を務める市の担当者は「新たな場所での放鳥を進めるなら、その地域の理解、参加は不可欠。『トキのために』という機運が島内全体で高まる」と話した。

トキに関わる団体の活性化にも課題はある。島内には保全に取り組む団体が20以上あり、官民一体で連携を深めようと2007年に「人・トキの共生の島づくり協議会」が発足した。トキの保護と観光振興の両立を目指し、観察時のルールを確立させるなど、増殖に大きく貢献してきた。

心となり、ビオトープ整備に取り組んでいるが、「トキに優しい環境は他の生物にとっても暮らしやすく、人間に不都合なこともある。みんなが理解し、我慢する。これは大変なことだろう」と複雑な表情で話す。

本州候補地



トキ放鳥15年

10月上旬、本州最後の国産トキ「能里」の捕獲地がある石川県穴水町で、「トキの里山里海ウォークラリー」が開かれた。約120人がかつてトキが生息していた森や池を巡り、同時に思いをはせた。

イベントを企画したのは同町の市民団体「能登トキファンクラブ」。スローガンは「能里をもう一度」だ。同県能登地域の9市町は、環境省が2026年度以降に目指す本州放鳥の候補地に名乗りを上げ、島根県出雲市と共に選定された。「イベントを通じて放鳥への理解を深めてほしい。地域一丸となって放鳥を目指したい」。会長の宮下源一郎さん(76)は力を込める。

クラブは昨年1月に数人の有志が立ち上げた。まだ

能登 実現へ機運醸成

〇〇下



かつてトキが生息していた石川県穴水町の森林を巡ったウォークラリー。能登地域で放鳥への機運を高めようと、市民団体などが活動している＝10月上旬、同町

催し開催や水田管理本腰

2年目にもかかわらず会員は200人にまで増えた。1970年に能里を捕獲した水田をジオトープにしたり、小学校でトキの歴史や水田が点在する能登地域

生態について講演会を開いたり、放鳥に向けて機運を盛り上げている。水田が点在する能登地域

2年目にもかかわらず会員は200人にまで増えた。1970年に能里を捕獲した水田をジオトープにしたり、小学校でトキの歴史や水田が点在する能登地域

かつてトキが生息していた石川県穴水町の森林を巡ったウォークラリー。能登地域で放鳥への機運を高めようと、市民団体などが活動している＝10月上旬、同町



放鳥候補地に選定された石川県の能登地域

か」と心配する。宮下会長も、「9市町の中でもトキへの思いには温度差があり、積極的に活動している団体はそう多くはない」と明かす。

石川県で70年以上トキ保護に尽力してきた羽咋市の村本義雄さん(98)は昨年5月、自宅敷地内に私設のトキ資料館を開設した。自ら撮りためたトキの写真や書籍などを展示する同館にはこれまで約千人が訪れた。「放鳥に向けた活動は始まったばかりで、トキへの関心の広がりはまだ足りない。トキを絶滅させたのは無関心だ」と村本さん。

佐渡にも何度も足を運び、トキの保護活動などを視察、住民の関心の高さを感じてきた。「佐渡のようにトキへの愛着を能登全体に広げていきたい」と力を込めた。

(この連載は佐渡総局・手嶋理、山田史織が担当しました)